

逸出のオオサンショウモが姿を消した

白 岩 卓 巳*

オオサンショウモが神戸の自然池に近いため池に逸出し、その場所で生育を続けていることについて水草研究会会報54号(1994年12月 P. 39~40)で角野氏が紹介された。

そのオオサンショウモは熱帯アメリカ、アメリカ南部、オーストラリア東部、アフリカ東部、マラヤ、スリランカに自生している *Salvinia molesta* Mitchell である。

わたしは *A. molesta* の成育状態を数年観察していたが、1996年度にはついに池から姿を消してしまった。1996年12月にも訪ねたが全く姿が見られなかった。群生していたときの1994年の写真1を挙げておこう。消えてしまったのが嘘のようである。どうして姿を消したのだろうか。考えられることは水質汚染等ではなくて1996年の冬(1~2月)の低温である。昨年2月に低温の日があったという記憶は薄いであるが、昨年2月の低温がオオサンショウモを枯らすことになったのは間違いない。

その証拠として1996年には長年観察している浮遊水生シダであるオオアカウキクサも低温の大打撃を受けた。日本に自生している他の一種のアカウキクサよりオオアカウキクサは寒さに強い種であるが、そのオオアカウキクサが枯れた。オオアカウキクサは奈良、大阪では例年1月から3月にかけても分裂によって個体数をどんどん増やしていくのが普通であるが、この年だけは全く違った。前年の暮れまで繁茂しかけていた胞子体は黒く枯れてしまった。それも観察地の一か所だけでなく数箇所においてそうであった。その後、奈良、大阪ではオオアカウキクサは5月になると姿を現し復活してきた。このことは日本海側の湧水地に生え続けるオオアカウキクサについても同様で、湧水地は湧き出る水の温度はほぼ一定しており一年を通して水温の変化も大きくないから枯れることはないだろうと予想していたが現地へ行ってみるとそうではなかった。この地ではもっと大きく影響を受け、9月になってやっと姿を見せてきたのである。

1996年の低温による植物への被害は陸上の植物についてもいえることで、一例として常緑シダのホソバカナワ

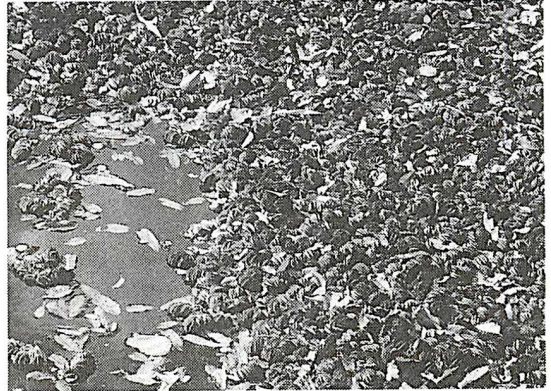


写真1 (上) 12月になると葉の上部は茶褐色になっているが、水面付近は緑色である。

(94. 12. 17 写)

写真2 (下) 3月になると葉は黒褐色になり、緑は見られない。

(94. 3. 12 写)

ラビという種は兵庫県では海に近い暖かい地に生えるが、場所によってはかなり内陸部までも入り込んでいる。この内陸部ぎりぎりまで入り込んだホソバカナワラビの群生地が高木層の木がないところでは葉がいちめん茶褐色になっているのをはじめて見て驚いた。

この池でのオオサンショウモが熱帯・亜熱帯のように暖かくない地で冬越しをする知恵は何だったのだろうか。観察を通して胞子繁殖は考えられず、次の二つのことが

*神戸市灘区鶴甲4-7 21-507



写真3 6月スイレンは葉を広げてきているが、オオサンショウモの姿はまだ見られない。
1996年の2月の低温で、ついに姿を見せなかった。(96. 3. 3 写)

いえるようである。

一つはオオサンショウモは夏から秋には大群生し、重なりくつつき合うようになるまで繁殖をする。くつつき重なり合うことは気象変化、寒さを防ぎ、生きていく知

恵の一つではないか。写真1のように上部の葉は茶褐色に枯れるが、内部の葉は緑のままである。1～2月の厳しい寒さで大部分は枯れてしまうが、彼らなりに身につけた生きる術の一つであろうと思われる。

第二はこの池に生えている常緑で葉を広げている栽培種のスイレンとのかかわりである。オオサンショウモは池一面に広がると、スイレンの葉の下まで集団でもぐりこんでいく。第一の知恵のうえにスイレンの葉のカバーができるというそう冬の寒さが乗り切りやすくなるのである。1995年5月スイレンの葉の下で生き残る成長芽を観察したことがある。

会報59号(1996年10月)の表紙写真の角野氏の解説に“在来種を脅かすスイレン”として山間部の自然度の高い池でも栽培種のスイレンが在来種のヒツジグサを池の隅に追いやりようとしていると書かれているのとは対照的なことで、スイレンが野外に逸出した栽培種を守っていたのである。それにもかかわらず数年間自然池に飛び出していたオオサンショウモは枯れた。もう姿を見せないのだろうか。

〈文献リストつづき〉

- 須古将宏, 1996. ハスの葉の枯れ方. 佐賀の植物 (32): 3-4.
- 田中光彦, 1996. 枚方でタヌキモとヒメタヌキモを見る. Nature Study 42 (5): 10.
- 中越信和・安部哲人, 1996. 広島県芸北町八幡地区の湿原植生の変容. 高原の自然史 1: 5-38.
- 野島 哲, 1996. 海草藻場群集の多様性と安定化機構. 日生態誌 46: 327-337.
- 浜島繁隆, 1996. 名古屋城外堀の水生植物の変遷. ため池の自然 24: 4-5.
- 浜端悦治, 1996. 水位低下時に計測された湖岸植生面積. 琵琶湖研究所所報 13: 32-34.
- 日置佳之・養父志乃夫・裏戸秀幸・田中 隆・逸見一郎・土屋憲昭, 1996. 水生植物保全のための溜池の生態構造図化. 環境システム研究 24: 89-97.
- 山中二男・中澤 保, 1996. 四国のイセウキヤガラ. 植物地理分類研究 44: 87-88.
- Nohara, S. & T. Iwakuma, 1996. Pesticide residues in water and aquatic plant, *Nelumbo nucifera*, in a river mouth at Lake Kasumigaura, Japan. Chemosphere 33: 1409-1416.
- Premasthira, Ch. and S. Zungsontiporn, 1996. Allelopathic potential of gooseweed (*Sphenoclea zeylanica* Gaertn.) in submerged soil. Weed Res., Japan 41: 103-106.
- Takamiya, M., M. Watanabe and K. Ono, 1996. Biosystematic studies on the genus *Isoetes* (Isoetaceae) in Japan. II. Meiotic behavior and reproductive mode of each cytotype. Amer. J. Bot. 83: 1309-1322.
- Yabe, T., I. Ikusima and T. Tsuchiya, 1996. Production and population ecology of *Phyllospadix iwatensis* Makino. II. Comparative studies on leaf characteristics, foliage structure and biomass change in an intertidal and subtidal zone. Ecol. Res. 11: 291-297.